

古文 読解問題 「竹取物語 ～ふじの山～」①

中将、人々^A引きぐして帰りまゐりて、かぐや姫を、え^B戦ひ止めずなりぬる事、こまごまと奏す。

薬の壺に御文そへ、参らす。ひろげて御覽じて、いといたくあはれがらせ給ひて、^①物も聞こしめさず。

御遊びなどもなかりけり。

大臣、上達部を召して、「いづれの山か天に^c近き」と問はせ給ふに、^Dある人奏す。「駿河の国にあるなる山なん、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを^E聞かせ給ひて、

^②逢ふこともなみに うかぶ我身には 死なぬくすりも何にかはせむ

かの奉る不死の薬壺に文具して、御使ひにたまはす。勅使には、調石笠と言ふ人を召して、駿河の国にある山の頂に持てつくべきよし仰せ給ふ。嶺にてすべきやう教へさせ給ふ。御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけ燃やすべきよし仰せ給ふ。そのよし承りて、つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなん、その山をふじの山とは名づけける。^③その煙いまだ雲のなかへ立ち上るとぞ言ひ伝へたる。

問一. 「竹取物語」は現存する日本最古の「作り物語」とされている。次の選択肢から「作り物語」を全て選びなさい。

ア 源氏物語 イ 平家物語 ウ 大和物語 エ 落窪物語 オ 平中物語 カ 茅花物語

問二. 傍線部A～Eの動詞・形容詞・形容動詞の活用の種類と活用形を答えなさい。

問三. 傍線部①「物も聞こしめさず」とあるが「物」とは具体的に何を意味するか、次の選択肢から選びなさい。

ア. かぐや姫 イ. 手紙 ウ. 人の話 エ. 食べ物 オ. 治療

問四. 傍線部②「逢ふこともなみに うかぶ我身には 死なぬくすりも何にかはせむ」に使われている表現技法を次の選択肢から選びなさい。

ア. 比喩 イ. 枕詞 ウ. 序詞 エ. 縁語 オ. 掛詞 カ. 押韻

問五. 傍線部③「その煙いまだ雲のなかへ立ち上るとぞ言ひ伝へたる」とあるが「その煙」とはどのような煙か次の選択肢から選びなさい。

ア. 帝がかぐや姫のことを思い、兵士たちに祈祷をさせたときに発生した煙
イ. ひどく悲しんだ帝の命によって、手紙と不死の薬を燃やした時に発生した煙
ウ. かぐや姫が帝のもとに帰つてくる時に目印になるようにと、起こし続けている煙

読解問題「竹取物語」ふじの山 ① 解答・解説

問一・ア・エ（順不同）

物語は主に、作り物語、歌物語、軍記物語、歴史物語の4つに分けられる。イの「平家物語」は軍記物語、ウ「大和物語」とオ「平中物語」は歌物語、カの「栄花物語」は歴史物語になる。

問二・A サ行変格活用 連用形

「具す」はサ行変格活用動詞の複合動詞になる。下に助詞「て」が続いていることから連用形だとわかる。

B マ行下二段活用 未然形

打消の語をつけると「止めず」になるため下二段活用だと判断できる。今回は下に「打消」の助動詞があるため未然形。

C ク活用 連体形

上の係助詞「か」の結びの語になっているため連体形だと判断できる。

D ラ行変格活用 連体形

「ある・をり・はべり」はラ行変格活用になる。下に「人」が続いているため連体形。

E カ行四段活用 未然形

使役・尊敬の助動詞「す・さす・しむ」は未然形接続になる。

問三・エ

「聞こしめす」に食う・飲むという意味があるため、「食べ物」が適切。

問四・オ

「なみ」の部分が掛詞になっている。「涙」と「なみ＝無い」の2つの意味で、会うこともできない（なみ）ことで体が浮かぶほどの涙を流している、という訳になる。

問五・イ